

になる、母親の乳は止まって幼児は死ぬ。老人、婦人は病気になる、戦列から脱落させてはならんと担架で担がれる病人、担ぐ人も涙である。全く地獄の様相である。

それから吉林へ向かって山の中を歩き、畑の馬鈴薯、トウモロコシを盗み食いしての生きざまである。

ようやく横道河子、牡丹江、奉天に着いたのは十一月の末である。横道河子でも牡丹江でも奉天でも、コモ包み、麻袋に包まれた遺体を馬車に山と積まれて郊外に運ぶのを見て、佐々木氏も自分の身に迫るのを感じながら、奉天での避難民生活を続けた。佐々木氏は、八月末に勃利街道でソ連が近くにきたので、山の中に避難し、満人部落で小銃の引き渡し交渉しているうちに二人の中国人が消えた。その後射撃され、佐々木氏は右腕を撃たれた負傷で生涯の傷痍者となったが、奉天では開拓団の多くの病人に対して看護、看病に東奔西走し、涙を流しての行動した佐々木氏であった。

翌二十一年五月末、コロ島から乗船、六月十八日、日本の土を踏む、感激の極みであった。

帰国後、二十三年、愛知県豊橋市東田町の陸軍演習地で不毛の土地、一町二反を開墾し幾多の困難を克服してきた。

平成三年、成牛九十頭、育成牛五十頭を飼育し、酪農経営を続けている。

顧みるに、「艱難汝を玉にす」の古語を大地に記した佐々木大吾氏である。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

あれから五十年

兵庫県 安部 二郎

私の父は関東都督府と呼ばれた時代に金州の警察に奉職し、昭和八年に関東局通訳生に任官、昭和九年には満州国新京にあった関東局へ転出、そのあと満州国政府国務院弘報処へ転出してゐる。父は終戦後、昭和二十年暮れにソ連官憲によりソ連に連行され、そして

カザフ共和国アルマタ収容所で死亡した旨、外務省より通知があった。母も既に亡くなり、父の渡満の動機や人生についての詳細はわからないが、大正初期に軍隊を除隊した後に渡満したようである。私の兄も妹も皆金州で出生しており、私が四歳のころに新京へ移転しているので、私には生まれ故郷である金州の思い出は全くない。

私が昭和十八年四月に新京第一中学校に入学したころには、戦況も日本にとっては日増しに不利に陥っていたのであるが、少年であつた私たちにはその実情はわからず、当時の風潮で、中学生もやがては、陸軍幼年学校や陸士だの海兵等軍人への道を進むことがもてはやされていた。翌年に二年生に進学すると、英語は敵国語であるという理由から学科目から削除され、軍事教練や戦場運動なる体力強化運動が、ますます盛んになってきた。中学四年生、五年生たちはこれに加えて学徒動員で工場などにも狩り出されて、もはや勉強どころではなくなり、更に昭和二十年に私が三年生に進学すると、我々も同じく軍事教練の合間に勤労奉仕

作業等が加わり、ほとんど学業らしい勉強は少なくなつてきた。

この年から中学校は四年修了と同時に繰り上げ卒業をすることになり、この年の三月に私の兄も四年修了で五年生と合同の卒業生を送り出すという始末となつた。当然、この年の新四年生は最上級生であるが、既に工場動員となつており、校舎内に二学年分の空き室ができ、我々新三年生が校内で最上級生のような形になつた。しかし、我々三年生にもまた学徒動員令が下り、満州東部ソ満国境の東寧報国農場へ向かうことになつた。

昭和二十年五月二十八日、新京神社の境内において引率教師二人と、我々百三十人の中学三年生は、父母や友人との別れの一時を惜しんだ。その後、我々の一行が国境線での惨事に巻き込まれるとは夢にも思わず、我々少年自身も、あたかも出征兵士にでもなつたかのような、晴れがましい気分になつた者も多かつたのである。

東寧^{とうねい}という街は新京の北方二百三十キロにハルビン

があり、更に東行約二百七十キロで牡丹江に達し、これから更に百二十キロ東行すると綏芬河すいぶんがに至るが、この綏芬河の手前の綏陽から南下し、道河を経て東行して至る国境の街で、その総距離は七百キロにも及ぶ。

ここには中国の金時代に三岔口さんさんこうと呼ばれた城跡があり、明時代にこの辺り一帯を三岔口と呼び、中国側の税関が置かれていた。清朝に入ってから、東寧と呼ぶようになったといわれている。

我々が出向いた地点は東寧の街から更にソ満国境寄りに八キロほど東へ進んだ所に、ぼつんと農場の小舎があった。もうここは国境最前線であり、関東軍の国境要塞地帯であるために、一般の人たちとは完全に遮断され、隔離されて一步も足を踏み入れることはできない地帯で、二キロほど前方にはソ連領が見えていた。ソ連側のスパイ（満系人）が出没しているとの噂もあり、付近一帯はごく小数の満蒙開拓義勇隊や、開拓農兵隊と呼ばれる農業従事者以外に人家はなく、一面に広がる農場地帯で、厳しい監理下にあった。

新京を発って途中、牡丹江に一泊し、翌朝再び列車

に乗り込みしばらくすると、列車内は強制的にブランドを下ろされて、外部を絶対に見ないようにと官憲が乗り込んできての注意があった。このような長途の旅であったが、初めて父母のもとから離れての共同生活という物珍しさから、すべてが楽しかったように記憶している。

当時、満州は日本に比べて食糧や衣服、生活必需品などにはまだ余裕があったが、それでも主食品はやはり配給制になっており、豆粕や麦などの混合が主食になっていたので、農場へ行けば腹いっぱい白米の御飯に農場でとれる新鮮な野菜や果物、それに牛肉、豚肉などたらふく食べられるものと期待していたが、農場での現実は全くの裏腹で、生産物はすべて軍へ納入されていたのか、我々の朝食は食器に一杯の雑炊にたくあん、昼夜食は雑炊又は高粱や粟飯に野菜炒めの毎日、だれ言うともなく「鉄てつの食器に鉄てつの箸、仏様ではあるまいし、一膳飯とは情けなや」と口ずさんでいた。朝は四時半起床、農場の朝礼、「天晴あつぱれ！、あなたもしろ！、あなたのだし！、あなさやけ！、おけ！」の

斉唱に一日が始まり、そして朝食もそこそこに農作業開始、時々農作業の合間に関東軍の下士官がやってきて、アンパン爆弾とか座布団爆弾とか呼ばれていた爆薬を抱えて、敵戦車に肉迫攻撃する訓練も受ける勤勞奉仕であつた。ここには電気、水道、ラジオ、新聞もなく、夜は九時消灯で外部からの報道の全く途絶えた状態にあり、週一回の休日があつたが東寧街までは八キロもあり、交通の便も悪く、途中、検問所を通るわずらわしさもあつてか、だれ一人街へ出た者はいなかつた。

このような生活は都会育ちの我々中学生にとつては大変な苦行とはなつたが、若さと規律正しい生活を送り、体力的にも健康は維持されて体はたくましくなつた。このような毎日の奉仕が実り、七月中旬から麦刈りが始まり、もうすぐ夏休みに入るので帰京できると楽しみにしていたところ、農場側の要請で作業は十日間の延長ということになり、一同がっかりはしたものの、一日一日と帰る日の近づくのを楽しみに、麦の積み上げ作業に従事していたが、八月八日夜、国境の上

空に不気味な赤色や青色の信号弾のようなものが上がり、遠くに戦車の轟音らしき物音に騒々しきを感じたが、そのときは、関東軍の演習でもやっているのかと思ひながら、夢は新京へとそのまま就寝。

翌九日早朝、いつもの通り起床して、農作業に出る支度に入ろうとしているときに、突如砲弾が当方へ飛来してあちこちに炸裂し始めたが、こちらには無敵関東軍あり、そのうちに当方からの砲門が一斉に火を吹くだろうと信じていた矢先に、重機関銃を担ぐ二人の兵が後退してきて、我々中学生、当時十四歳、十五歳の少年に向かつて「あとは頼んだぞ！」と言つて通り過ぎるのに対して、何の疑いも持たずに軍国少年として育つた我々も「大丈夫です。死守します！」と元気に返答したものだつた。

当時我々も平素から、いったんソ連との間に交戦状態に入ったなら、軍から銃や兵器、弾薬を受領して戦闘に入るものと覚悟はしていたが、前線農場隊舎から、後方約二キロにあつた農場本部からの後退通知が遅れ、通達があつて急ぎよ身の回り品をまとめて本部へ後退

到着したのが午前十一時ごろ。

状況把握が不十分で突然のソ連軍の一方的開戦ではあるが、この時点では、まさかソ連軍が侵入してくるとも考えられず、無敵関東軍が死守するものと思われるっており、取りあえず、一人三日分の米と二人に一個の飯盒と毛布一枚が支給されて東寧街の県公署に行き、指示を受けるために更に六キロほどの強行軍で後退を始めたが、このころになると、ソ連軍戦闘機の低空飛来しての機銃掃射や、ソ連側からの砲弾も次第に伸びて飛んでくる中を避けながら、東寧県公署に十五時ごろ到着。

早速、飯盒炊さんによる昼食兼夕食をとっていると、県公署の役人から詳細ははっきりしないが、ソ連軍の一方的攻撃により危機が迫りつつあり、最後の列車も既になく、今後の配車は望めないで、直ちに徒歩により鉄道沿いに後退するようとの指示が出された。

関東軍の要塞砲がいつ火を吹くのか、いつ一斉に反撃するのかと切齒扼腕して陣地を見るが、ついに一発も発射されずに、逆に要塞陣地に敵弾が被弾している

のを横目にしながら、駅近くの小高い丘の上に出て、今しがた我々が円陣を作って食事をしていた所を眺め下ろしたちようどそのとき、ソ連軍の砲弾が落下して人がばたばた倒れるのを目撃。初めて人の死ぬ場面を見て、もう一刻の猶予もならないと身の危機を感じ、自然に足が早まり先へ先へと急ぐうちに、ある老婦人が、孫らしき二人の幼子を連れて倒れているが目に入る。恐怖のためか「おばあちゃん、早く行こうよ」と繰り返し呼びながら、幼子たちが両側から手を引って張るが、老婦人は立ち上がる気力も見られない。近寄って尋ねてみると、若夫婦の留守中の突発的なことで、急ぎよ孫たちを連れて逃げ出したものの、高齢のために力尽きて動けないと言うが、我々にしても三日分の食糧と少量の身の回り品を担いでの強行軍であり、いつ背後からソ連軍の攻撃を受けるかもしれず、危機迫る緊急時にあり、いかんともすることができずにその場を去ったのであるが、私にはあの光景がいつまでも脳裏から忘れ難く残っている。

夜に入ると、ソ連軍の照明弾が我々の頭上に飛来す

るようになり、ますます恐怖心がおおられてきて、歩けるだけ歩いて真夜中ごろに二人一枚の毛布にくるまって休息。翌、午前一時ごろ全員元気を回復して再び強行軍が始まり、次第に辺りが明るくなると敵機が上空に現れ始め、爆音のたびに分散避難をするので、弱りかけた者にとっては爆音を喜んだり、休憩時間を要求するようになる。歩けど歩けど安全地帯には到らず、そろそろ落ごし始める者も出て隊列は伸び、前に十人、後に数人の塊とばらばらになり始める。

二人の引率教師のうちの一人は折しも開戦の前日に、学徒帰京のための連絡に新京へ発った直後の事件で、この脱出時には一人のみであり、同級生のうちの健脚者は先へ先へと進むが、落ご者をかばいながらの一行の列は更に伸びて收拾がとれず、教師は取りあえず、十人ぐらいの者を先発隊として先を急がせ、軍警に連絡をとり落ご者の援助の手段を取ったが、このとき、先発隊となった者たちとはついに合流することはなかった。また教師から皆に重いと思う品は惜しまずに思い切つて捨てて身軽にするようにとの注意があり、私

はこの時点では、次の街か駅までたどり着けば必ず助かるものと思ひ、何を思つたのか肩に食い込む水筒も捨ててしまい、後々まで水に苦しむことになった。

鉄道沿いに歩行することはソ連軍の攻撃目標になると判断し、少し道を外れて山道を歩くことになったが、東満の人里を離れての行軍であり、方向や目標物となる物も無く、一行の行軍は更に苦難となる。時には山中で停車している日本の消防車の運転手が、ソ連機の機銃掃射のために既に死亡しているのを見たり、ある若い母親が赤児の死体を手で土を掘つて埋めている姿を目にして、無念と苦難の道をまざまざと見せつけられた。山中で仮眠をとり、翌十一日午前四時ごろ起床して行軍開始。途中、敵機の攻撃を受けながらも沙河駅に着き、一人の現地人を発見して道を尋ねると、もうこの街にはだれもいない。ここから沙河子（さか）への道と稔稜（ぼりやま）（ムーロン）への道しかなく、沙河子までは十七キロだというので稔稜へ行くことにした（後に聞くと、このとき稔稜は大激戦場であつたといわれる）。細い軍道を歩いていると、日本軍兵士が後から追ひ

付き追い越して行つたが、武器を持たない疲れきつた老兵たちであつた。夕刻になり、大粒の雨が情け容赦なく降り始め、一軒のあばら家を発見して、一同箱詰めの状態でここに仮眠となつたが、南京虫の攻撃に遭い、アンペラをめくると、虱しらみが真つ黒になるほどうごめいており、じつとしておれないが、それでも家の中で寝るのは三日ぶりでも雨も凌げるので、いつしか眠り込む。

このとき満系警官がきて、「前方にはもうソ連兵がきているので、左手の山へ登つて、囚們の方へ出る道を探して逃げなさい。もし、このまま前進すると山道では水も食糧も得られずに餓死しますよ」と、教師に知らせてくれたそうで、全員直ちに出発となり、教師から一同に対して「ソ連兵がすぐ近くまで迫っているので、万一の場合は各自ばらばらに山の中に潜り込め」と注意があり、いよいよ死期迫るのかと身のすくむ思いであつた。

もうこうなると険しい山道は避けて、構わず前進するうちに前方に軍馬が日に入り、日本軍将校がいたの

で尋ねると、「これは大城だいじんしやう廠を通つて牡丹江に行く軍の間道で、自分たちは大城廠に引き揚げるところだ」というので我々もその山道に入る。しかし、この山道はうねりくねつた道で、原始林がそびえ立つた昼間でもなお暗い険しい山であつた。山頂近くになるころ、また大雨の来襲で頭から骨の髄までずぶ濡れになりながら、ずるずる滑る道を前の者の背中をにらみながら、雨と汗と涙で一步一步踏みしめて登つた。もうだれ一人声も出ないが、苦闘の末に峠にたどり着くと、そこに「萬歳峠」と銘打つた標識を見る。登り十キロ、下り十キロも歩いたころにはもう日も暮れて、仮眠をとろうと山肌に背をもたせかけて三十分もうとうとしたとき、後方からきた人の話では先刻通つた萬歳峠まで敵の戦車がきているというので、直ちに出発することになるが、全員疲れきつており、歩きながら眠る者も続出し、着衣は濡れてずっしりと重く懸命に逃げるが、足をとられて何度も転び泥だらけになり、その夜はついに歩き続けるうちに十三日目の朝を迎えた。

小休止を繰り返しながら歩くが、足に豆ができてい

て休むと立ち上がれないほど疲労は極限に達していた。それでも背後にソ連軍の急迫を感じながら、先へ先へと気ばかり焦る。午後になり、やっと平野が開け、前方に大部落が見えてきたので一回元気づき歩き続けて、夕方四時ごろに全員大城廠に到着。

ここには日本軍の大部隊がいると知らされて、ほつと一息。各自じゃが芋を掘ったり、包米を煮たりして食事をとつての大休止となる。もうここまでくればという安堵感から、その夜はぐつすりと一泊し、翌十四日朝七時出発。

しばらく歩いたら前方に山が見え、麓まで歩いていくと守備隊の兵士がおり、「もう大丈夫だ」と言われ、更に進むと自動車部隊に遭遇した。疲れている者は車に乗せてくれると言われたが、疲労の激しい者十人ほどを乗せ、我々はまた行軍を続けた。

行けども行けども大平野であったが、再び峠に差しかかり、原始林の中に入ると前方にトラック部隊がいて、指揮者らしき下士官の兵が「先刻のお前たちの強い態度に感心した。今からお前たちを石頭^{せきとう}まで乗せ

て行つてやる」と言われ、地獄に仏とばかり乗車。生き返つた心地で車上に揺られて南下する。途中で道路や橋の修理などしながら、飯盒炊さんや川で汗を流したりの生活を送り、十七日朝には大きな部落の門をくぐつた所で下車。ここは牡丹江省馬廠^{ばちやう}という朝鮮人部落で難民の救済所にもなっており、多くの一般邦人たちも収容されており、ここで馬肉、豚肉、米などの支給を受けて久しぶりに肉食して元氣百倍。そして安堵感からその夜はぐつすり休み、翌十八日朝、乾パンその他の配給を受けて石頭^{せきとう}に向けて徒步行軍となる。

石頭に到着すると日本軍部隊から米や砂糖、牛缶詰が支給され、白米飯に味噌汁の炊き出しを受け、心からの安堵感に浸るが、ここで停戦協定の話聞いたときには、これは日、ソ間に円満協定ができたのか、もしかすると勝つたのかなとさえ思ったが、教師は悲憤慷慨して「日本は負けたのだぞ。忍び難きを忍び、日本の将来のことを考え、お前たちはこれから一人で十人分の働きをしなければならぬぞ！」と涙しながらに諭された。

翌十九日未明に非常呼集があり、兵士の話によれば、牡丹江市は既にソ連軍の手中に落ちており、ソ連軍將校斥候が石頭に向けて南下中であると告げられ、我々は直ちに南下したが、皆眠くて途中で居眠りしたり、また目覚めては行進したりするが、前夜の美食のために下痢患者が出て数人が落し始めるのを左右から抱えて、午後一時ごろに東京城に到着。

そこでは軍の貯蔵物資が焼かれていたが、馬廠でも軍の食糧庫に火が放たれて三日も燃え続けたといわれていたが、今こども燃えている中から小麦粉、小豆、砂糖、塩、味噌といった物資を掘り出して、ホットケーキやぜんざいなど各自思い思いの手料理を作って腹を満たした後、軍の將校宿舎らしき住宅を発見して分散入舎する。新京を発つてから二カ月ぶりに畳の上で寝られた。ここには一般邦人の避難者も集まっており、互いに無念さと苦難の道程を語り、慰め合ったりしたが、何とも悔しいけれど連日の強行軍のせいか、いつしか眠り込んでしまった。

翌二十日、轟音に目覚めて外に出てみると、ソ連軍

の機械化部隊の入城だった。少年兵が多く見られ、花模様のまるでカーテンのような擬装野戦服を初めて目にして、芝居の芸人のようだなあと思ったりしていたが、初めて見る大きな戦車や見上げるほど大きなトラックなど見る物すべてが物珍しく、ぼんやり見送っていると少数の日本兵士が武器、弾薬や食糧を持てるだけ持って、急きよ山中へ入るんだと叫びながら隊列を離脱して行く姿も見られた。

そのうちに移動命令があり、近くの兵営に入り、満人や鮮人の暴動を警戒して日本人を一カ所に集めたことを日本軍の兵隊から告げられ、以後は共同炊事の炊き出しとなる。もうこのころには、現地人たちが我々日本人に対して罵詈雑言を吐き、投石などがあり、やがてソ連軍兵士がやってきて、日本軍の武装解除となる。ここに至って私は停戦協定というが、完全に負けたことを悟らざるを得ず、一体、今後我々の身の安全はどうなるのだろうかと不安を感じ始めた。

八月二十五日ごろからしきりに移動命令があり、南下して馬蓮河ばれんがに收容されたり、また翌日には久田見開

拓団跡に入れられた。ここには日本の丸腰の軍隊や一般邦人も多く收容されていたが、以後、入れ代わり立ち代わり人々の移動があつた。

ある日、奥地からきたという開拓団の男性数人が物凄しい形相で我々に語りかけてきた。それによるとソ連軍侵攻の報に接して関東軍の保護もなく、部落で現地人の暴動が起こり、妻子を連れての脱出はもはや不可能と考え、ソ連軍兵士の慰み者にされるよりはと自分の妻や人妻の首を日本刀で撓ねたが、手が震えて切つた先が肩に食い込んだり、撓ね損じると、妻たちは「早く切ってください！」と叫んだと言う。その他にも女や子供を防空壕に避難させておいて、上から手榴弾を投げ込んで、死亡を確認してから男性たちは少数の銃を持って脱出したが、途中で敵弾に倒れたりして結局捕虜となつて、今ここに入れられたと言う。衣服も傷み、中には麻袋に穴を開けて頭や腕を出して体を覆っている人や素足の人もおり、皆、異常に興奮していた。正常なときには言えないし、聞くこともできないほど恐ろしいこの世の地獄とも思える話を自分自身

が耳にして、我々も明日の生命さえわからない現状が、迫っているように感じられた。

数日後にこの人たちの姿は見られなくなり、そのうちに軍人や一般邦人や我々少年集団は各々分けられ、我々学生は開拓義勇少年隊の人たちと一緒に收容された。その後もなぜか何度もソ連軍兵士の「ダワイ、ダワイ」と叫ぶ声に收容所を移動させられ、時には鉄線柵の中の畑の中に押し込まれ、使役に出されて高粱こうりやんや唐蜀黍とうもろこしを刈り取つて、その莖で小屋造りをしたこともあつた。

九月に入つて十八歳以上の者はソ連軍の使役に行くことになり、このとき、我々の教師や義勇隊の該当者たちはソ連軍に連行されて、日本に帰国するまで教師とは再会することはなかつた。

九月中旬ごろになつて東京城開拓会館跡に移されて再編制となり、指導者のいない十八歳以下の集団となり、毎日しらみ取りで一口を過ごすのだが、共同炊事で義勇隊の人が炊き出してくれる高粱や粟の粥もだんだん量が少なくなり、やがて一日に一度飯盒の蓋に一

杯の粥だけとなった。脱糶して野草を摘んで煮て食べたり、バツタを捕えて焼いて食べたが、秋深まり次第にこれらの補給もつかなくなり、栄養失調のために骨と皮の生ける屍のようなある級友は、加えて下痢のために糞尿の垂れ流しの状態となった。元氣付けようと皆で明るい話をする、「笑うと顔の皮が突つ張つて痛いので笑わせなくてくれ」と、彼は真剣は顔をして皆に哀願する始末で、傍らに寄ると何とも異様な臭いで、よく見ると蛆が湧いているが、本人は気が付かないようであった。その後、彼はソ連軍の救急車でどこかに移送されたが、これが彼との別れとなった。

九月下旬になると、北滿ではそろそろ越冬の準備に入ることになるが、義勇隊の人たちは煉瓦れんがや土を練つて、窓や開口部を塞いで寒さを防ぐ術を心得ており、我々も手伝つて準備に入り、夜になると屋内で焚き火を起こして周りに寄り集まり、煉瓦や石を火の中に入れて熱しておき、懐炉や湯たんぽ代わりに抱いて寝るのであるが、常に義勇隊の人たちが火の近くの良い位置を確保して、学生の入れている煉瓦や石を跳ねのけ

たり、我々に向かつてぶつつけたり横暴さが始まる。やがて空腹と不安感から果たして生き残れるのだろうか。父母のもとへ帰れるのだろうか。明日の生命はだれが保証してくれるのだろうかと焦りを感じてきたころ、広島出身の義勇隊員は「儂わらはのオ、親も兄弟も帰る家も全まづてやられたんじゃけんのオ、どうせ、儂わらもそのうちに死ぬんじゃけんのオ」と半ば自暴自棄氣味で対象を我々に向け始め、焚き火の近くに學生が陣取つたりすると、「退け、退け！」とばかり義勇隊の古年兒たちが割り込んできて、薪や煉瓦を我々におつけたり、時には薪で叩かれたり、次第に氣も荒くなる。

同級生の中で体の大柄な者はなぜか狙い打ちされるようになり、あるとき、二人の級友が彼らにしたたか殴る、蹴るの暴行を加えられ、「ひいひい」叫ぶ。またある者はショベルで散々殴られ、「お母さん」と泣き叫ぶ。もう我々は体力的に極限状態にあり、明日は朝を迎えられるだろうかと互いに死のことを考えるようになった。このような生死の境を彷徨している状態

の中で、互いに日本人であり、また一人でも多くの同胞を救助すべきときに何故に年長の腕力のある者が、しかもグループで弱者を襲うという心境は一体何事なのだろうか。二人の級友はその後あまりのリンチの激しさに耐えきれずに、ある夜、脱走し、夜ごとに鉄路沿いに歩き続けて新京へ到達し、学校関係者、父兄たちに我々の生存を伝えたのである。

収容所内での開拓義勇青少年たちの中学生に対して行われた横暴野卑な行為は、奴隸や家畜にも劣る人道違反、人権無視と言えるが、敗戦後、シベリアの収容所で生活を送った体験者の記録文などの中にも、同じ日本人同志で同じ境遇にありながらリンチ事件があったようであり、他方、同じ俘虜として抑留されていたドイツ軍将兵は、共に生きて行くために食糧の配分にも上下の隔てもなく公平に分かち合い、楽しい時も苦しい時も常に助け合い、皆で軍歌や陽気な歌を合唱し、そのハーモニーは大変美しかったとある。

軍歌といえば日本のものは「戦友」、「出征兵士の歌」、「海行かば」など聞いていても悲壮感や哀調があ

り陰湿であるが、ドイツの軍歌の曲、歌詞ともに厳しい軍律の中にも明朗さ、誠実の中にもユーモアがあり、親しさの中にも教育があり、ドイツ軍隊内のムードがわかると教養のある元抑留体験のある一文官の手記にあった。

我々の収容所生活は、先の見通しもないまま、十月に入り、寒さが身にしみるようにになると、今までのように日中の日光浴もしらみ取りもできなくなり、死を覚悟せざるを得なくなった。

十月の中旬に、警備の鮮系保安隊から全員集合の号令があり、「お前たちは近日中に自由になるので準備して待て」と嬉しいニュースがあった。

引率教師がいなかったために解放後の行動について皆で協議の結果、義勇隊員とは別れ、徒歩により石頭から牡丹江へ行軍することとし、収容以前に病院へ移送された者や、収容後に移送された者、その他の不明者の消息についてはわからないまま、今現在の衰弱者数人は悲しいが、保安隊に頼んで残すことにして、十月十二日昼ごろ解放となり、直ちに出発したが、途中で一

人が歩けなくなり、一人で收容所へ引き返すことになった。この時点で人員は百三名と記録にある。

夕刻、石頭に到着して民家に分散宿泊させてもらい翌十三日朝、全員集合すると、ある級友の一人は頭を坊主に剃られており、宿泊した家の中国人のおやじさんには是非家の子になれと言って放してくれないので、ここでしばらく休んで、あとから帰ると言うので彼を残して行軍する。

次の部落では宿営の設備がなく受け入れてもらえず、更に行軍して夜遅く蘭崗らんこうに着き、分宿させてもらったが、ここは朝鮮人部落であり、屋内にオンドルがあり、暖かくて全くの夢心地で熟睡させてもらい、翌朝、当地を出発して夕刻に寧安ねいあんに到着したところ、ソ連軍の收容所に入れられて嚴重な所持品検査の後、当所に留められたが、翌十五日朝に釈放されて、ここからソ連軍兵士が同行して終日強行軍となり、翌十六日午後牡丹江に到着。

当地の関東軍将兵の收容所で日本兵士から食事や散髪などの奉仕を受けて、翌日午後牡丹江駅に行ったが、

明朝五時まで汽車の便がないというので、うろろろしている日本人救済会の日本人がやってきて、一人に軍票五円ずつ支給され、難民救済所に一泊。翌、早朝に駅で貨車に乗車してハルビンまで行き、その夜更けに新京行きの貨車に乗車することができた。十月二十日昼前に東寧脱出から六十二日目に、ついに、新京の地を踏むことができた。新京は長春と昔の地名に戻っていた。

家に帰り着くと両親ともに驚くやら喜ぶやら、てんでこ舞いとなる。仏前には私の写真と白米の膳が据えられており、一瞬戸惑いを感じたが、生還したことが実感として沸き、涙がこぼれたものだ。

東京城收容所から脱走した二人の級友は一カ月近く歩き続けて帰京し、彼らの通報により父兄による救出隊が出たが、我々とすれ違いになったが、その後の調査では病院などに移送された者のうち、四人は生還することができなかった。

敗戦後の新京市内ではソ連軍人による、日本人個人の所有財産の略奪があちこちで行われ、相手は自動小

銃を突きつけての強奪やシベリア送りのための日本人男性狩り、そして婦女子に対する暴行沙汰は、野獣のごとく路上でさえ見受けられたといわれる。

また敗戦と同時にすべての日本人は職を失い、ほとんどの邦人がわか商人となって個人財産の売り食いや、にわか屋台を出しての商人と化したり、現地人に雇用されての労働提供としての生活を送ったのであるが、この間に同胞による同胞の密告で処刑された人や、ソ連抑留となった人たち、しかもシベリア送りの人数不足ということから、日僑俘善後連絡事務所より隣組組織を通じての人数提供の割り当てさえ強要されたのである。シベリア抑留者六十万人の中には、このような全くの一般人や路上歩行中にソ連軍兵士に逮捕された人たちが含まれているのである。また越冬に耐えられなかった奥地からの避難民の病死も残酷を極め、寒い冬のある時期には毎日のように、教台の荷馬車に山と積まれた屍が墓地へ運ばれたのである。

私は彼の地で父を失ったが、命あって昭和二十一年秋に日本の土を踏んだが、父親がいなく、日本に住む

地盤もなく、ずい分長い期間を転々と住地を移動はしたが、幸いにも電子工学院にて電子工学を学び、船舶無線通信士の資格を得た。国際航路に就航して、三十年間に八十カ国に寄港して、国際的視野を大きく開眼させられた。私は過去において、北満での死の彷徨ともいえるほどの過酷さを体験したが、この三十年間に学んだ国際学とともに、大変貴重な体験を得て、常に過去を振り返って感謝している次第である。

船舶会社を定年退職して数年間、日本語学校で外国人に日本語を教えてきたが、平成三年秋に、全くの奇縁から兵庫県福祉センター内に在る中国帰国者自立研修センターの藤岡重司所長から、日本語講師に招かれて、現在は旧満州から帰国の残留婦人や孤児とその家族たちと共に、毎日を過ごしているのは、目に見えぬ何かの縁で引き寄せられたのだと感慨無量で日々を送っている。

合掌

【執筆者の横顔】

安部二郎氏の父は、関東都督府と呼ばれた時代に金州の警察に奉職、次に新京にあつた関東局に転出、満州国建国となつた後は、國務院に転出。終戦後の昭和二十年十二月に、ソ連官憲に連行された。その後、外務省から、父はソ連のカザフ共和国のアルマアタ収容所で死亡した旨の通知があつた。

安部氏は、昭和五年十月二十七日に金州で生まれ、父の勤務に伴い四歳のとき新京に移転。

昭和十八年四月、新京第一中学に入つたころは、戦況は日本不利に陥つていた。十九年に二年生に進学すると英語は敵国語であるとの理由で学科目から削除され、軍事教練や体力強化運動が盛んになった。四年、五年生は学徒動員に狩り出された。

安部氏らが三年生に進学すると学徒動員命令が下り、満州東部のソ満国境、東寧報国農場へ向かつた。その後において国境線での惨事に巻き込まれたのである。

朝は四時半起床、農場で朝礼、朝食後の農作業開始、作業の合間に関東軍の下士官がきて、爆薬を抱えて敵

戦車に肉迫攻撃の訓練をうける勤勞奉仕である。

二十年八月八日、突如、ソ連軍の攻撃に遭い、ソ連の一方的開戦となつた。

農場本部から後退の通知をうけ、十五時ごろ東寧県公署に到着したが列車は既になく、鉄道沿いに後退するようにとの指示が出された。

ソ連軍の砲弾が落下して、ばたばた倒れるのを目撃、初めて人の死ぬ場面をみて、一刻の猶予もない身に危険を感じた。

山に入り、河川を渡り、街に入つて満人の雇人となつてわずかな賃金を得て生き、餓死を免れた。同級生の瀕死を救うこと幾度か、もつて生まれた健康に感謝しながら、ついに東寧脱出から六十二日目に新京に着き、両親と再会、共に驚き喜びあつた。

仏壇に自分の写真と白米の膳が据えられており、阿部氏は一瞬戸惑いを感じたが、生還したことが実感となり、涙を流した。

阿部氏はソ連に抑留された父を失つたが、昭和二十一年秋に日本に引き揚げる。やがて電子工学院で学び、

船舶無線通信士となり、国際航路に就航して三十年間、八十カ国に寄港して国際的視野を大きく開眼させられた。

定年退職し、平成三年に兵庫県福祉センター内にある、中国帰国者自立研修センターの藤岡重司所長から招かれて、残留婦人や孤児とその家族と毎日を過ごしている。誠実一路の阿部次郎氏である。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

新京・終戦前後の私の思い出

沖繩県 池宮城 澄子

私は大正十三年一月十三日に福島県二本松で生まれました。父は当時、税務署に勤務していましたので、五所川原その他を二、三年ごとに転勤をしており、青森県野辺地で小学校にありました。二年生のとき、山形県米沢市に転校。四年生のときは山形市第五小学

校に転校。この学校の高等科二年のときに、父の満州国への転職を知らされました。

当時の満州国は建国後間もなく、治安もまだ不安であつたらしく、親戚はみんな父の翻意を促したとのことでありますが、父の決意は変わらなかつたようです。今から考えますと、父には子供七人の人世帯の日本国内での生活の維持に、強い不安感があつて、父母は相談し合つての決意であつたように思われます。

父は昭和十二年、まず単身で当時の満州国の首都新京特別市の満州拓殖公社に赴任しました。任地の様子の下見と住宅の確保が目的だったのでしよう。

翌十三年三月、満州の厳寒も過ぎましたので、父は家族を迎えに下関まで出向き、母は七人の子供を引率しての渡満で、下関で落ち合つて関釜連絡船で釜山に上陸。朝鮮半島を一路縦断して鴨綠江の鉄橋を渡ると、そこはもう大陸の入口で、汽車が新京駅に着いたのは、昭和十三年三月十五日の深夜でありました。

前夜からの雨で新京駅前の広場の水たまりには氷が張っていて、寒さにふるえたことを今でも覚えており